

# シベリア鉄道で兵隊さんと連夜の飲み会 ④

近藤 節夫 (エッセイスト)

♪カチューシャ かわいや 別れのつらさ せめて淡雪 とけぬ間に〜♪

学生時代に読んだトルストイの『復活』に強く心を動かされ、何とかして一度あの雪の降る大地を横断して、『復活』をしっかり疑似体験してみたいものだとか常々妄想していた。

2003年3月、まだ雪深い真冬に念願のシベリア大陸横断を決断した。旅の盛り上がりを考え、この横断の旅ではシベリアへ流刑されたカチューシャを追って東方へ向かったネフリュードフ公爵の動きとは逆に、極東のウラジオストックから首都モスクワへ向かうことにした。終始雪中のシベリアを列車から肌で実感し車中で6泊する10日間の旅だった。今まで大きなザックを背負い海外武者修行を何度も繰り返してきたが、自然条件の厳しい旅の単独行は年齢的にも、体力的にもそろそろ潮時と考え、これを最後の



いざ！シベリア鉄道の旅へ  
(ウラジオストック駅にて)

返してきたが、自然条件の厳しい旅の単独行は年齢的にも、体力的にもそろそろ潮時と考え、これを最後の

ビッグ・チャンスと捉えた勇断が決め手となった。

とはいえ、シベリア鉄道全線は、出発地ウラジオストックからゴールの首都モスクワまで、地球一周のほぼ1/4に匹敵する延々9,288 kmの世界最長の鉄道である。建設が始まったのは1891年、完成したのは1916年、あのロシア革命の前年という大工事だった。全線が電化されたのは、私が訪れるほんの4か月前だった。

それまでロシア国内ではイルクーツク、チタ、ハバロフスクなどシベリア各都市をはじめ、名所バイカル湖やサハリン(旧樺太)を訪れてはいたが、広大なロシア大陸を横断する、これほどスケールの大きい旅を試みたのはこれが初めてだった。これまでは季節的には幾分寒く冬近しとは言いながら、まだ晩秋の季節で豪雪下の『復活』や、♪雪の白樺並木 夕日が映える〜♪トロイカのイメージには程遠かった。だが、今度こそは厳冬期ということもあり、出発前からカチューシャに会えるような心躍るロマンチックな夢を描いていた。

この旅には別に密かな願望があった。口の重い大人(たいじん)ロシア人の懐に入って象のような巨漢ロシア人という民族とは一体どんな人たちか、探ってみようと考えたのだ。周囲にはロシア人以外に外国人はいない。会話にしても普段馴染みのないロシア語以外まったく言葉が通じない。書かれた文字はすべてキリル文字だからまったく意味不明である。始発駅ウラジオストックでは戸惑いながらも何とか16両編成の2



ウラジオストック駅舎正面

等車両4人用コンパートメントに乗り込むことができました。発車直前になって3人の若いロシア軍兵士があたふたと同じコンパートメントへ駆けこんで来た。休暇で田舎へ帰っていたが、これからモスクワ近郊の部隊へ戻るといった話だった。だが、最初から会話が通じたわけではない。旅行中車内で話す言葉は、すべてロシア語である。車両ごとに車内の清掃からトイレの掃除、はては湯沸かし器の管理までお世話する女性車掌さん、その他に食堂車のおばさんをはじめ、途中駅の駅員、キオスクの売り子、各駅で列車へ寄って来る行商のおばさんらとの意思の疎通は、ジェスチャーだけが頼りだった。それでもこれまで武者修行で培ってきた身振り手振りや中途半端な英語に、スマイルで和ませる自己流のパフォーマンスによって何とか意思の疎通を図ることができた。